

- , 1983: エルチチョン噴火と気候を気象庁記者クラブに説明, 気象庁ニュース, No. 903, 27-28.
- , 1984: 最近における世界の異常気象の実態調査とその長期見通しについて(Ⅲ). 気象庁測候課, 1983: 最近における大気混濁度の変動について, 観測部時報, 119, 4-5.
- , 1983: 最近の海外における大気混濁度の推移, 気象庁ニュース, No. 926, 260-261.
- Linke, F., 1922: Transmissions-Koeffizient und Trübungsfaktor, Beitr. Phys., 10, 91-103.
- Mass, C. and S.H. Schneider, 1977: Statistical evidence on the influence of sunspots and volcanic dust on long-term temperature records, J. Atmos. Sci., 34, 1995-2004.
- 小畑 実, 1984: 高層気象台(館野)における日射観測の結果について——1982-エルチチョン火山の噴火に関連して——高層気象台彙報, 44, 37-43.
- 澤田可洋, 1984: 1982年エルチチョン火山の噴火——1980年セントヘレンズ噴火との比較——, 測候時報, 51, 111-122.
- Tilling, R.I., 1982: The 1982 eruptions of El Chichon Volcano, Southeastern Mexico, Earthquake Information Bulletin, 14, 164-172.
- 田端 功, 高橋克己, 1984: エルチチョン火山噴火後のライダー観測結果について, 測候時報, 51, 173-177.
- 田中正之, 1975: 火山噴火と気候, 火山, 20, 363-376.
- 山内豊太郎, 1983: 日射量が減った!?—エルチチョン噴火と大気混濁度, 気象, 313, 4-7.
- , 1983: エルチチョンの噴火と日射量, MAPニュース, No. 4, 11-13.
- 山元龍三郎, 1978: 火山噴火と気候変化, 天気, 25, 81-102.



朝倉 正・内嶋善兵衛・
久保木光熙・長坂昂一 著
異常気象時代

—いま何が起っているか—

ブルーバックスB-574, 講談社,
1984年7月刊, 232頁, 580円

副題「いま何が起っているか」が示すとおり, 本書は, 異常気象とは何であるのか, なぜ発生するのか, 異常気象が社会経済へどのような影響を及ぼすのか, 対策をどうするか, など, きわめてなまなましい話題をとりあげている。

最近とくに注目されている火山噴火やエル・ニーニョ現象をはじめとする異常気象の要因をかみくだいて説明してある。今後予想される二酸化炭素の増加がもたらす影響など, 人間活動が気候を変えるという問題にもふれている。

世界における食糧生産の現状と問題点の詳しい記述もある。ばくぜんと知っていたとはいえず, 数字で明らかにされると, いま日本は深刻な状態にあることを再認識させられる。また異常気象に左右されるのは農業だけでなく, ほとんどの産業で異常気象に対する脆弱性が大きくなっていることが具体的に示されている。

さらに起こりうる天候の変動幅を評価して, 経済活動

においてどのような対策をとるべきかを考慮する時代になったこと, 最後には, 専門家の説を紹介しながら日本の長期天候予測について歯切れのよい記述がされている。

気候変動にかかわることを網羅した解説書としてよく書かれているだけに, いくつかの図の説明が不十分だったのは残念である。たとえば, 何の等値線であるか, その単位は何であるかが書かれていないものがある。しかし「天気」の読者であれば, すぐに何を表しているか理解できる程度のことなので心配はいらない。

本書は4人の共著である。執筆者が多いので読みづらいかと気にかけてながら読みはじめたが取り越し苦労だった。全体としてよくまとまっており, 各章ごとに執筆者が代わったことを意識せずに読み進むことができる。新しい研究の成果が数多く紹介されており, 異常気象についての知識を整理するのに助けになる本でもある。一読をおすすめしたい。

なお各章の表題は次のとおりである。

1. 異常気象時代に備える
2. 世界天気図から異常気象をみる
3. 海洋におきた異常現象
4. 異常気象にゆらぐ農業
5. 激化する異常気象

(青木 孝)